

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 韓国人日本語学習者による日本語アクセントの知覚と産出

氏名 稲田 朋晃

論文内容の要旨

1. 研究目的

本論文の研究目的は、日本語を外国語として学習する韓国人日本語学習者が、日本語のアクセントをどのように知覚し、産出するのか、その傾向を明らかにすることである。先行研究から検討すべき点を整理し、下記の3つの研究課題を設定した。

1. アクセント体系の影響：韓国語のアクセント体系は、韓国人学習者による日本語アクセントの知覚と産出にどのような影響を与えているか。
2. 語頭子音の影響：韓国語において語頭子音の種類がアクセントパターンに影響することは、韓国人学習者による日本語アクセントの知覚と産出にどのような影響を与えているか。
3. 音節言語であることの影響：韓国語がモーラ言語でなく音節言語であることは、韓国人学習者による日本語アクセントの知覚と産出にどのような影響を与えているか。

上記の研究課題を検討するために、4つの実験（実験Ⅰ～Ⅳ）を実施した。

2. 実験の概要

2.1. 実験Ⅰ（第4章）

ソウル方言話者、慶尚道方言話者、日本語母語話者の3群に対して、 $[\overline{\text{ナ}}\text{ナナ}]$ から $[\text{ナナ}\overline{\text{ナ}}]$ へピッチが7段階で移行する刺激、および、 $[\overline{\text{ナ}}\text{ーナ}]$ から $[\text{ナー}\overline{\text{ナ}}]$ へピッチが7段階で移行する刺激を用いたAXB同定課題を実施し、得られた反応を分析した。

その結果、「ナナナ」系列については、日本語母語話者と慶尚道方言話者の反応の離散性は高く、両者の反応曲線の形状は近似していた。一方、ソウル方言話者の反応の離散性は低く、反応曲線の

形状が日本語母語話者と慶尚道方言話者とは異なっていた。このことから、自立モーラの連続におけるピッチの下がり目の位置の知覚に関しては、慶尚道方言話者は範疇的に知覚し、ソウル方言話者は範疇的に知覚しないことが示唆される。

「ナーナ」系列においても、「ナナナ」系列と同様、日本語母語話者と慶尚道方言話者の反応の離散性がソウル方言話者よりも高かった。「ナーナ」系列においては、韓国語が音節言語であることがアクセント知覚に影響を与えているかどうかについても検討した。3群の反応の閾値を比較した結果、慶尚道方言話者と日本語母語話者の間には差がなく、音節言語であることの影響は確認されなかった。

2.2. 実験Ⅱ（第5章）

実験Ⅱでは、実験Ⅰで検討した観点に加え、分節音（語の子音の声の有無）および、語中位置（ピッチ下降が生起するモーラの語中位置）の影響を検討した。実験Ⅰと同一の被験者群に対して、ピッチの下降形状が7段階に変化する3モーラの無意味語のペア8組を刺激とした反復実験を実施した。得られた結果に対して、反応曲線分析、F0曲線分析を行い、さらに、個人間の差を明らかにするためにクラスター分析を行った。

語頭子音が/n/の刺激系列と語頭子音が/t/の刺激系列に対する反応を比較した結果、両者の間に顕著な差はなく、語頭子音の声の有無がアクセントの知覚に影響していることを示唆する結果は得られなかった。

ピッチ下降の語中位置の影響については、次のような結果が得られた。ピッチの下がり目が第1モーラから第2モーラへ遷移する3モーラ語（ $[\overline{CV} \overline{CVCV}] \sim [\overline{CVCV} \overline{CV}]$ ）と、ピッチの下がり目が第2モーラから第3モーラへ遷移する3モーラ語（ $[\overline{CVCV} \overline{CV}] \sim [\overline{CVCVCV}]$ ）に対する反復音声进行分析した結果、 $[\overline{CV} \overline{CVCV}] \sim [\overline{CVCV} \overline{CV}]$ においては、実験Ⅰと同様、日本語母語話者および慶尚道方言話者が範疇的な知覚傾向を示し、ソウル方言話者は範疇的でない知覚傾向を示した。一方、 $[\overline{CVCV} \overline{CV}] \sim [\overline{CVCVCV}]$ においては、慶尚道方言話者の反応の離散性が日本語母語話者よりもやや低かった。このことは、慶尚道方言話者にとって、語末のピッチの下がり目の知覚が困難なことを示唆している。

2.3. 実験Ⅲ（第6章）

実験Ⅲでは、実験Ⅰと実験Ⅱで検討したアクセント核の「位置」の知覚だけでなく、アクセント核の「有無」（有核／無核）の知覚についても検討した。ピッチの下降開始位置が第1モーラ内から徐々に後退し、最終的にピッチの下降がなくなるような刺激をモデル音声とし、ソウル方言話者に対して反復実験を行った。得られた結果に対して、母語話者の判定を基にした反応曲線分析、およびクラスター分析を実施した。

クラスター分析の結果、被験者は、おおよそ①「1型と0型の対立で知覚している被験者」、②「2型と0型の対立で知覚している被験者」、③「1型、2型、0型の対立で知覚している被験者」の3つのタイプに分類できることが明らかになった。このことから、ソウル方言話者にとって、アクセント核の有無の知覚はアクセントの位置の知覚よりも容易であることが示唆される。さらに、ソウ

ル方言話者は、「非 0 型、0 型の対立の習得 → 1 型、2 型、0 型の対立の習得 → すべての型の対立の習得」という習得順序を経ることが予想される。

2.4. 実験Ⅳ（第7章）

実験Ⅳは、ソウル方言話者を対象とした産出実験である。被験者に3モーラおよび4モーラの有意義語を発話させ、ピッチの下がり目を分析した。カイ二乗検討および残差分析を実施した結果、ソウル方言話者のピッチ実現には、①「母語のアクセントパターン」、②「調査語のモーラ構造」、③「調査語の語頭子音の声の有無」、の3つが影響を与えていることが明らかになった。

3つの中でもっとも強い影響を与えていたのが①「母語のアクセントパターン」である。3モーラ語では全体の47%、4モーラ語では全体の59%が第2モーラにピッチの下がり目を持つ発話であった。これは、基本形において第2音節に高音が付与されるソウル方言のアクセントパターンの影響を受けたものと考えられる。

②「調査語のモーラ構造」については、3モーラ語、4モーラ語の両者において、ソウル方言話者は長母音にピッチの下がり目を置く傾向があることが明らかになった。中東（2001）で提案されたピッチ付与規則と本実験の残差分析の結果を照合したところ、2～4音節語のすべてで規則に合致する結果が得られた。

③「調査語の語頭子音の声の有無」については、語頭子音が無声音の語は第1モーラにピッチの下がり目が置かれやすく、語頭子音が有声音の語はピッチの下がり目がない音調で発音されやすいことが明らかになった。つまり、語頭子音の声の有無が産出におけるアクセントパターンに影響を与えていることが示唆された。この結果は、韓国人日本語学習者の発話において、語頭が無声破裂音の場合はHL型傾向となり、有聲破裂音の場合はLH型傾向になるとした福岡（2008）の結果を支持するものである。

3. 総括

本論文の第一の研究課題である「韓国語のアクセント体系は、韓国人学習者による日本語アクセントの知覚と産出にどのような影響を与えているか」については、実験Ⅰの結果から、慶尚道方言話者は自立モーラの連続におけるピッチの下がり目を範疇的に知覚するのに対し、ソウル方言話者は範疇的に知覚しない傾向があることが示唆された。しかし、実験Ⅱの結果では、慶尚道方言話者にとっては、語末のピッチの下がり目の知覚が困難であることも示唆された。これは、慶尚道の一部の方言では、名詞の語末でピッチ下降の対立がないことと関連している可能性がある。産出面では、ソウル方言話者の発話において、第2モーラにピッチの下がり目が置かれる発話が多く、これは、第2音節に高音が付与されるソウル方言のアクセントパターンが影響したものと考えられる。

第二の研究課題、「韓国語において語頭子音の種類がアクセントパターンに影響することは、韓国人学習者による日本語アクセントの知覚と産出にどのような影響を与えているか」については、実験Ⅱにおいて、語頭子音の声の有無がアクセントの知覚に影響していることを示唆する結果は得られなかったことから、知覚面に与える影響は限定的であると言える。一方、実験Ⅳの産出実験においては、語頭子音が無声音の語は第1モーラにピッチの下がり目が置かれやすく、語頭子音が有聲

音の語はピッチの下がり目がない音調で発音されやすいことが明らかになり、産出面ではより強い影響を与えていることが示唆される。

第三の研究課題、「韓国語がモーラ言語でなく音節言語であることは、韓国人学習者による日本語アクセントの知覚と産出にどのような影響を与えているか」については、実験Ⅰと実験Ⅱの結果から、知覚面では明確な影響が観察されなかった。一方、産出面では残差分析の結果から、ソウル方言話者には長母音にピッチの下がり目を置く傾向があり、日本語の特殊モーラとピッチの下がり目の間にある規則が十分に習得されていないことが明らかになった。

以上